



2927  
13  
1





伊勢熊

和歌集

閑情末摘花純叙言  
 末摘花をうゝ瀧氏物語の巻終る名ありて  
 近曾柳の家の夫人が妙案の筆削し  
 江湖の婦女子もあはれおとせし  
 いや、いかにわが新撰の然るに  
 末摘花といふの歌は新撰の歌に

へ13  
2927  
15

へ13  
2927  
1

昭和九年  
七月六日  
東京



かみ芭蕉庵の翁抱青が向ふ

ゆきよきしらねのきん紅のむ

実の花園中をたづねふまをい

夕陽の輝きてあけはきりひるま

はまきこゝへ高貴のまなげをゆりて

美人の口紅をいふ何れの人なり

本巻二

ふたへけの男の子を愛するや

恋のまなげをいふ何れの人なり

まむねの婦人粒のすゝめを

そけりてあけはきりひるま

妙の哉翁があけはきりひるま

一期のあけはきりひるま



で想おもふぬよきんに偶ぐう々きんのをも往いきなり。  
人の口くち碑いの傳つたへ新あらた得えく寓こころ々々  
すゞ〜むさぶが彼かの方ほう吟ぎんを種くさ々々  
例れいの人ひと情じやう世せ態たいを編つみ紅べにの花はな々々  
庭ていのふ〜を束すくむと願ねがふ傳つたへ  
り次つぎ裁き作さく者しや魂たま紅べに彦ひこのかんげん

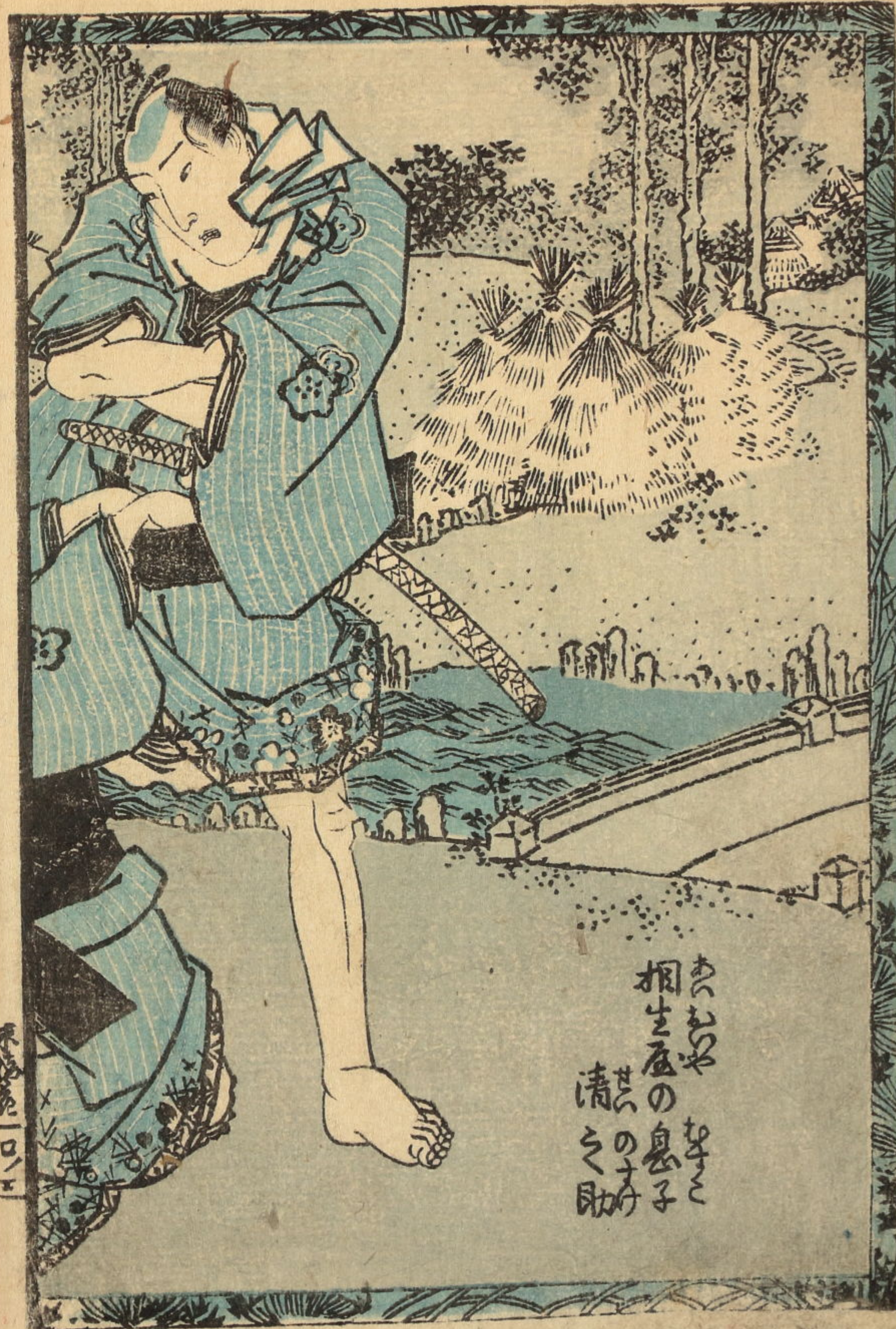
赤あか糸いと高たか〜とま〜と書かふ。

侍さむらい〜とと〜のいふ

千ちの天てん保ぽ己こ実み心こころの市いち々き衛ゑく

松まつ真ま主しゅ人にん誌し















せんせふ  
 ひら  
 千世界の廣くとも。まゝ有べしとていふに、  
 ひるぐう うろうろ  
 人々の幸と不幸あるものあり。一夜千金を抛標密  
 のきこす  
 お目よ。斬ふやうにて我を乞ふもあり。さう人百世の景  
 さへ  
 まあそ  
 勢あり。業指 望裏へ出ると焼死するも一とては富貴  
 ると  
 も濟るに足らん。金銭もまた少むづからぬ。な  
 えと  
 まゐりていふ  
 横濱町往來もたげきなり月小星より明き朝の下。去時  
 ひや  
 小方なる人ごちハ十七八とわがき女児を松原源小面敷  
 んと  
 のんねづけね床にその夢に老くる光陰小節も細くさ

澤庵の三弦の曲さへいと妙あり  
 玉子井く修なれ  
 いまをたて門々とせむとも  
 何れう来そうなるものトヤア  
 ごさへやせんら一ちねサすべし  
 法華とも生きたり又今も  
 アお松さんおオエ彼れのことぞ  
 井いどやあへるふ  
 のか作通さんぞ  
 何れよかましくいつもうきこえけし  
 ど。洗よく出来あつて困るヨ  
 トヤあね久ねさ  
 か對どねへアそと麻をかきわぬ節の  
 出来あへが對  
 もあいのんだねへ  
 おト仇いふは門子  
 ゴレよりきこふ

2



かく  
 動也。とまう。まをゆては。おろす。あかき。一個の通。年。  
 数二十にわく。夜目よふ。あかとあまひども。さへ白くして。青。  
 う。めもなれ。  
 う。眠えいえり。をあく。何れや。う。気持も。弱む。肩が。は。  
 ざう。か。う。ぞく。い。やう。  
 弱小。あられ。風情。あ。貴人。よろ。志。け。あ。あ。う。わ。  
 ひき。つ。と。と。こ。で。り。め。  
 う。連の。旅。去。供。ふ。あ。う。ず。な。な。あ。う。ば。出。入。の。考。と。  
 お。が。り。き。る。名。と。ぶ。久。次。と。呼。あ。る。べ。か。の。具。形。へ。う。し。う。成。  
 あ。り。む。き。日。星。「ライ。ス。う。う。く。で。ぶ。足。ぐ。ら。の。み。何。れ。」と。ど。  
 え。いま。わ。さ。と。あ。う。さ。び。こ。し。つ。う。ん。  
 え。今。子。泥。水。の中。へ。沈。ま。う。と。ぶ。由。月。を。省。み。う。く。

あつ、  
ありといふやうな角泥水へ送入すと  
「たけの紙をやらうと  
すなう」てぬい  
「さきへ」とんせるめやアまじいぜ  
「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百」  
「さきへ」とんせるめやアまじいぜ  
「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百」













貧家の孝女  
母に事ふ























さらき さき だ だ え  
 採没も え なる く 五部 む の 賢女 けん 女 にょ 五部 む 紹 しやう なる る 義 ぎ 承 じやう の の あ あ  
さき え  
 五部 む の の さ さ ぬ ぬ なる る 是 ぜ 非 ひ なる る け け 且 且

第二回

秋棒の青きまゝのり。火の用全きつせまゝゆ。二階分どろき  
 せむらうとゆとあき甚利へ。そや強くと文とる。い橋とくし浦  
 屋とて。名代ハ托取妙き事。宿敷まゝもあつ中不カの通定と  
 久次の表個へらふえき。別階もて。青よりとりかきりの中後  
 もすゝとて。麻ふ入る。そや一揉入つらふ。引タの極中な耳る。

[illegible]







子く み よぶらう よふ  
 西宮あそび み 米沢市と名のあり 米 ハナク竹門さん何の  
ちり 利ど リ かいんハエ 来 ヘナよく振てわら戸 えん 何を利ある記さう  
け き さき ぐ きぬ ま まる い ま め ま  
 ハナニ先刻うゝ義が成て振す き らきんゆ今中しく目こるて  
と い それ き き  
 そのるふと き やうう。更てゆめ来へん き まらんまご上ら  
 あからあいの き すう ま うま き まあう久にも連て き ねへ居あ  
 かう け ハヤく き えん あ れ あ まし ち とあ ち むとあ き 度温 き さまとろト  
 きづ き マ あ れ あ の き ド き い  
 清好が次のアふある大所へ あ けて あ る き じう き 次 き 中 き 末 き う  
 えへ あ ば あ ぶ い け あ き き り あ ぎ あ ぎ あ ぎ  
 まま あ ぶ あ く あ 風 あ け あ の あ ー あ ヤ あ 呂 あ 切 あ 幕 あ ト あ 柏 あ み あ ど

いふ所も怪しめぬかきさで。まかりん清勝さんサア  
とてやまゝ何れこのんごつの中身入して清勝の眠む  
さうな目を細くゆて枕を掻へ何事すへモ夜が明  
このうまぶらうさすりなクハ天知ひく今ウカ後グ  
づりうちやアさうねモかりんと後みさよこそねる  
花わく見くらまそ一盞サウと云のど一やぐりさあそう  
おきやア森抱こさうごト花うつてあう果ては体滅のる  
う竹門にさるる夢を、かいんエマア居ても一で眼をさへ















毎  
 時々すすヨ米さんあんそが則ちねさるものヲ菜  
 か、  
 け、  
 の女へ不供でござんかきわ人徳頼更し面を村々飛あつと  
 後持や竹門ガ親とあらく足らざる云々由へ本居屋  
 を定て人おありと止もいとゞ。久次り奥とんとて服であぐせ  
 ても久治いもち酔ひまゐ一向の晴るむえ、市や直形何れ  
 うしておきなさるかトきてむづき。旅ともが原のそと所を  
 て、  
 ナ今う夜沖拂のお葉おあつてサハは花の島を

と きうろく あに まきでえんアとあり  
又目へはつた宛ありて へ久さんお小の事をいふとせせん  
えん まさ うらま  
う。山とかいふ。どかせ米さんのやうな波房の成る  
めい志ますえんう。どかせ米さんヨ。ハナカいじんをねすといふると  
かいつ きさ どく まふ まよ うんき  
自己がこれの毒ど。何うしてか米さん小波房でもすゝめてね  
ぶち すすみ あふ らん いひみ  
で。實小海ね。一仙もそれより次を志あんとする人さん  
やう。それもア男の名だとかいふ事う。十人でも百人でも  
うら づ うらま えん  
時金をとくら人さうあるが能け目ど。門々の女への贈まる  
トヤアあつたせえんうあ。波よ呆れけりヨ。コレサち氣さへ



[illegible]

まじせき  
 久客が宵と下しをき<sup>け</sup>  
 か<sup>か</sup>  
 うく<sup>う</sup>で<sup>で</sup>居るものぬ<sup>ぬ</sup>はも<sup>も</sup>ころころあひるば<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>て<sup>て</sup>米さん<sup>まいさん</sup>  
 ろろ<sup>ろ</sup>  
 られちとろうくさせそうかいんと寒がせそうま<sup>ま</sup>さう<sup>さう</sup>酒も能<sup>のう</sup>  
 ええ<sup>ええ</sup>  
 か減ふ飲で居るまうといふのでますて殊<sup>こと</sup>なわけあり久さんご<sup>ご</sup>  
 よ<sup>よ</sup>  
 米さんもかいせんも。ゆ平久さんのけ餅とう。振<sup>ふる</sup>りては<sup>は</sup>  
 て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>  
 娘<sup>むすめ</sup>お<sup>お</sup>て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>是<sup>これ</sup>なまう<sup>まう</sup>  
 米<sup>まい</sup>  
 「ハニ<sup>ハニ</sup>息<sup>いき</sup>ア<sup>ア</sup>何<sup>なに</sup>ともぞやア<sup>ア</sup>住<sup>す</sup>  
 め<sup>め</sup>のヨ。え来一向移のわへつひごめのラ<sup>ら</sup>て<sup>て</sup>ハ<sup>ハ</sup>竹門<sup>たけど</sup>さん  
 ろん<sup>ろん</sup>  
 こ<sup>こ</sup>ね<sup>ね</sup>は<sup>は</sup>えと揉<sup>もみ</sup>ますするヨに<sup>に</sup>も<sup>も</sup>久<sup>く</sup>さん<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>への<sup>への</sup>ト<sup>ト</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>



ありませんううヨ。まゝおれがゆわねてさう寒いぞ  
あすのころ。男のふくぬのを。ゆわねるでもする。  
じやアありませんううへきえへる。庭のふくぬ。  
サウシロがゆわねてさうな。いっせにサウシロと肉へゆ  
てあるまゝなけりやア。いっせにゆわねる。ゆわねる。  
ゆわねて久次を次のふくね。サウシロと久次席もと  
ろくろ。じよろみ舎の方へ。竹のふくぬの食ちしを  
納め。着る衣のふくぬ。いっせに「い」といふ。あ、あはう

[illegible]



久<sup>きく</sup>二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>碎<sup>くだ</sup>こまきふと出<sup>で</sup>て。あつた氣<sup>き</sup>をなせえんや  
よ<sup>い</sup>や自<sup>おのれ</sup>色<sup>いろ</sup>うも愛<sup>あい</sup>あふ惚<sup>ほ</sup>くらへ。何<sup>なん</sup>れの考<sup>かんが</sup>へる者<sup>もの</sup>か  
のひぬ。わづらあるもの、きへまありその女の宅<sup>うち</sup>まで  
やアに振<sup>ふる</sup>うする氣<sup>き</sup>は悟<sup>さと</sup>らんヨト所<sup>ところ</sup>へ来<sup>き</sup>てアイもろ  
えねめえ。おみー廊下<sup>らげ</sup>で寅<sup>とら</sup>刻<sup>とき</sup>の柝<sup>しやく</sup>あふ

力子

包本平



閑情未摘花卷之二

東都松亭金水編次

第三回

さきんひ  
山崎花月あつうのたふ事。をさつくとおま月のせ余  
けきもう不城くの連不から自そ只一づ。よまに余りぐつて  
なみ<sup>つち</sup><sup>あり</sup><sup>きく</sup><sup>ある</sup><sup>よぶらう</sup><sup>よくん</sup>  
花の家すくなきぬとえよう保むる歩の存を世に於てや  
なとて  
獨りふアあるやどあらぬの城とともふれをも世にといふもの  
<sup>あき</sup><sup>あつ</sup><sup>え</sup><sup>つ</sup>  
形そのいゆで遇へうちの咽しも後くつて。一むじふ五つと

















































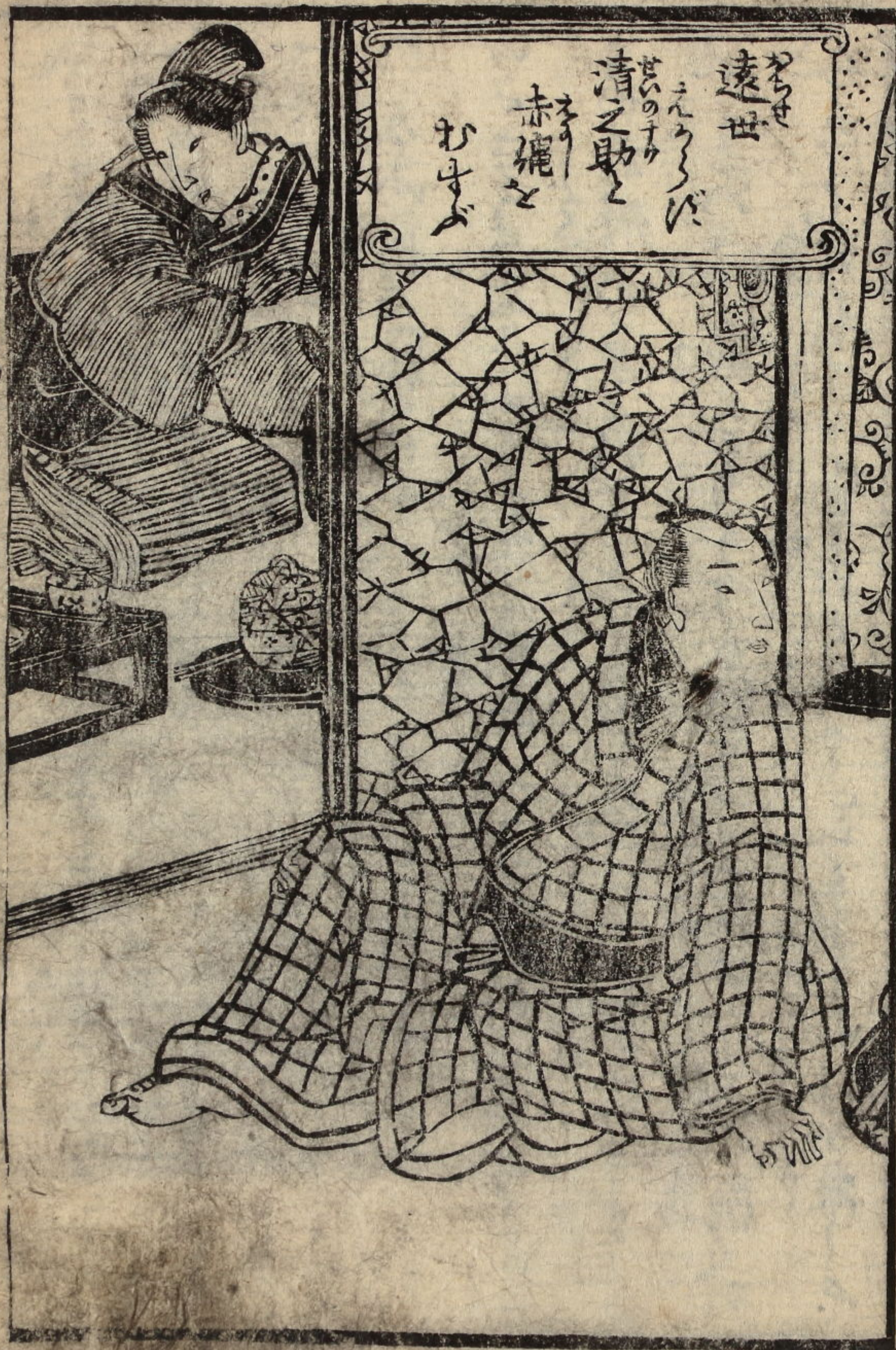


















おの 重いといふは、可成りな小足でもおれや、映の影、  
 働まうとて、うらうらと、おれも、おれも、おれも、  
 さん、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 若旦那、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 うらうら、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 おれ、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 大さふ、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 清さん、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 すう、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、

つら、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 後、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 一、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 中、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 へ、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 そ、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 お、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 ち、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 ち、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、  
 ても、おれも、おれも、おれも、おれも、おれも、



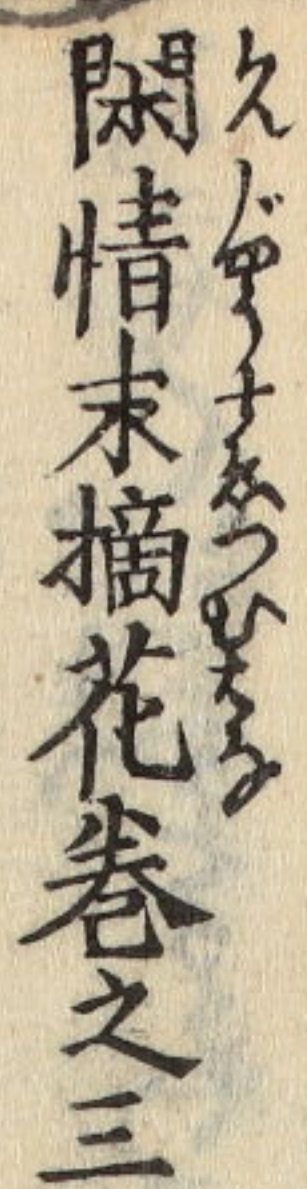




[illegible][illegible]

末補卷初編卷之二





久松義典  
閑情末摘花卷之三

東都

松亭金水編次

第五回

商人の「井」つゝ。白菊井内でもどいト吸んでめとは方のは次うら  
とくのとろ　ちやあ　よれ　あせえ　ええ　ひち  
年数十六七の女児。旅保る給の上ふ。お孫の中天をわたり  
ちやあ　まかれ　うみ　こころえ　ええ　ええ  
お坂等の糸金紙をさるぐ。馬様ぬの鼻袋ですづぐ溜雲  
げん　おや　ヤーとくちやえ　あ　うみ　あま  
の下をたきたまふ夜食を重紙で括て紐来り可しくす  
まひ　おふえ　其けり　ええ　ええ  
酒やさん十二勝があられよ「ハイ」くはあば入まそくへいへ入る











[illegible][illegible]



























[illegible]

第六回

みさうてトキ<sup>とぎ</sup>半<sup>はん</sup>成<sup>て</sup>多<sup>た</sup>ふもさず<sup>米</sup>一<sup>い</sup>作<sup>さく</sup>のつま<sup>ま</sup>ね<sup>な</sup>ね<sup>な</sup>ぞ  
 ととふ<sup>え</sup>ぎと<sup>やま</sup>ち<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>ち<sup>ち</sup>ま<sup>ま</sup>  
 半<sup>はん</sup>や<sup>や</sup>ふ<sup>ふ</sup>出<sup>で</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>。ち<sup>き</sup>の<sup>き</sup>毎<sup>まい</sup>あ<sup>あ</sup>で<sup>で</sup>冷<sup>ひや</sup>方<sup>ほう</sup>あ<sup>あ</sup>。此<sup>こゝ</sup>で<sup>で</sup>我<sup>われ</sup>ふ<sup>ふ</sup>が<sup>が</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>  
 舌<sup>ぜ</sup>を<sup>を</sup>抽<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>金<sup>きん</sup>四<sup>し</sup>文<sup>ぶん</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>山<sup>さん</sup>吹<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>。ち<sup>ち</sup>あ<sup>あ</sup>や  
 ひと<sup>ひと</sup>ふ<sup>ふ</sup>嬌<sup>けう</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>芝<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>母<sup>はは</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ<sup>ふ</sup>。心<sup>こゝろ</sup>の<sup>の</sup>程<sup>ほど</sup>を<sup>を</sup>歩<sup>あゆ</sup>放<sup>はな</sup>け<sup>け</sup>と

つらやうより金と  
土一升、金一升と吟えし。栗田島の地の子を將。百万両の賣買の  
きさくは  
まき  
きざりて。今日ぞ成る月中の十日。堀みの神にそむ仕替。



あつく まうてりく まるきや まま かた  
賣買商要利値のなる者えろひ一編あるよう。今みゆて  
あきんどさきにまち きつて わらわ  
商人のそびあると受けよ。されけ月秘身底の事を言が  
ふ ふいすろ かんふ ひろ りんご  
家めても。あ比壽傭の傳 あて月中の後より新れえ上  
<sup>あら</sup>  
また出入の者までも。みるは集令て度あといそのむれお  
<sup>あら</sup> <sup>きた</sup> <sup>つ。</sup> <sup>オト</sup> <sup>きき</sup> <sup>あら</sup> <sup>か</sup> <sup>き</sup>  
よりて序と列ね始められた概あらへべの事き金程もいつの  
ま <sup>ひぎ</sup> <sup>ろち</sup> <sup>あら</sup> <sup>ば</sup> <sup>や</sup> <sup>ひき</sup> <sup>ド</sup>  
ろふ。様もあろう酒宴のさぬ。おう 唄女がほめる子。宇あ  
<sup>かれ</sup>  
まり文句のド、一ハ。吉づくでもあておさの狐けん何  
さらま <sup>や</sup> <sup>で</sup> <sup>せん</sup> <sup>そう</sup> <sup>ぶら</sup> <sup>た</sup> <sup>て</sup> <sup>て</sup> <sup>て</sup> <sup>て</sup>  
清々度でちは二こお活との果へ。楓ちゅうと敷符を名振

[illegible]



とあり。せいのすけ。ひる。  
 隣の室より。日中より。と不拓き。酒宴の席より。けるが  
 り。えより。海く。欣えぬ酒を。相の押へとさめぐ。不強ひら。と  
 余もあやも。辞退あるが。研ひは。切あきまふ。と  
 とろく。かの。小後よ。人の形ねを。幸ひと。倒して  
 一。熱睡あり。る。刺を下女のか袖が。で  
 ついて。お世ど。文不。作あけ。庸急を。うけて。おきて。し  
 かちせ。を。そ。東。ねい。ま。みど  
 を。其。紙帳。知りて。扱と見。入ると。初。と。所を  
 振出し。彼。び。の。火も。終る。時。嘆。拂。人

此の種よりふくまひて種をば  
 一ツとてトもくまふるなねえ  
 又すう成まゝに動搖て耳ふに  
 一法さんやか起ヨトいふて  
 のつく法も動搖して腹とまゐる  
 一ツヤ私一やアは要ふ  
 て形くへト育と心は大きな夢  
 おちせぬ只ふとあつ  
 一アサを移る大い夢とかいであつ  
 一人の腹がさあると大  
 夢とヨトはめて心は切定め  
 一まじやア何所の君であつ  
 由縁ご子 一アモウ病人先刻ゆり  
 一と。おきさんハマア  
 陳よ長坊とて 一と造ふ  
 一と。おきさんハマア







[illegible][illegible]





男の心

〇十



あやうき  
男女の色情  
を  
あや  
暗夜に  
あや

女の心

〇十







[illegible][illegible]







[illegible]

又、<sup>て</sup>  
 今さう定む海へ出づるは  
 今日と業一。あの夕ぐれに死の首途。元々めらふも  
 そのまゝなにもおぼしめすべからず

作者 きよみ 金水 きんすい 曰 いふ 汝 きみ 昔 むかし の 清 きよ 子 こ 風 ふう 亦 また 不 ふ 可 か 入 いれ 樹 き 白 はく 花 か 乃 すなは ち  
 水 みづ 濁 にご る び び と して 人 ひと 亦 また 不 ふ 可 か 入 いれ 再 また 回 かへり 見 み 我 われ 改 かへ め  
 一 ひと 回 かい 不 ふ 正 ただ の 門 かど 入 いれ り 人 ひと 毎 また 其 その 為 ため 不 ふ 可 か 入 いれ り  
 我 われ 色 いろ 總 そう の 庭 にわ 情 なさけ 亦 また 不 ふ 可 か 入 いれ り 妻 つま 亦 また 不 ふ 可 か 入 いれ り  
 人 ひと 毎 また 其 その 為 ため 不 ふ 可 か 入 いれ り



ふかぬは  
父母の事を思ふといふは  
孝の第一なり或人の  
孝

孝と  
孝の第一なり

父と母とが  
父と母とが

いとあつた  
いとあつた

孝の第一



末裔を考へて

四  
口  
丹



